

# 「硝子張の箱」の外へ

## 『彼岸過迄』論

北島 咲江

夏目漱石の『彼岸過迄』という作品は、かつて「須永の話」を中心に論じられることが多かった。「須永の話」に論点を据えた論考の中では、『彼岸過迄』というテキストの約半分（風呂の後）から「報告」まで）において中心人物である敬太郎は、しばしば狂言回しのような形で扱われてきた。そこで、敬太郎が物語上で頻繁に姿を現す部分を前半、彼が姿をほとんど見せなくなる部分を後半として、テキストはしばしば二分されて考えられた。前半・後半という分裂ゆえに構成の破綻が指摘され、その結果、前半と後半を結ぶものが求められることにもなった。

この作品を貫くものとして、山田有策は敬太郎に注目し、彼をテキスト内において「読者」を誘う「装置」と論じた。<sup>〔1〕</sup>

さらに、山田は「松本の話」によって敬太郎が人間の認識の仕方を初めて知らされていく<sup>〔2〕</sup>点に注目し、敬太郎の人的「成長」に言及している。また工藤京子は、「聴き手」としての敬太郎に注目し、その「変容」を論じた。工藤が「聴くことそのもののうちに潜んでいるドラマ性、つまり話の質にまで対応する〈聴き手〉自身の変化」に着目したことに<sup>〔3〕</sup>より、『彼岸過迄』は「聴き手」敬太郎を軸に展開するドラマとしてテキスト全体が構成されていると読むことができるようになったのである。

「聴き手」としての敬太郎の態度が変化しているという点について、山田や工藤の指摘はもつともだと言えるだろう。森本の話聞いていた頃の敬太郎に散見された「聴き手としての暴力性」<sup>〔4〕</sup>は、須永や松本の話を聴く敬太郎にお

いては影を潜めている。しかし、「聴き手」敬太郎の「変容」の理由はどこにあるのだろうか。工藤は敬太郎の「変容」の理由を、森本、須永の母、須永、松本の話の聴く過程において見られる「聴き手」としての経験の蓄積や、探偵行為を経験した敬太郎が「聴き手」のなすべきことを意識した点にあると論じている。だが、森本から松本へ至る「聴き手」敬太郎の「変容」は、果たして段階的にステップアップしていくような形で起きたものなのだろうか。

工藤の指摘の通り、敬太郎は須永に対しては「須永その人に調律することのできる視線をも獲得」<sup>6</sup>している。しかしなぜ敬太郎は、須永以外の「他者」たちには「調律することのできる視線」を持ち得ないのだろうか。「聴き手」としての「変容」、言うなれば「成長」を遂げた敬太郎ならば、「結末」の章で、たとえば森本に「調律することのできる視線」を持ち、彼の「過去」や「現在」への深い了解を、須永に対したのと同じように示すこともできたはずである。しかし、敬太郎は須永に対してだけ「調律することのできる視線」を持ち得る。ここからわかることは、敬太郎にとって須永という存在が、他の人物たちとは異なる「特別」

なものであったということではないだろうか。

本論考では、工藤が示した敬太郎の「聴き手」としての「変容」を支持しながらも、その「変容」がどのようにして起きたのかという点について考察したい。敬太郎の「変容」は果たして、工藤が指摘するように、森本との会話を除くすべての会話において継続的に促されたものだったのだろうか。むしろ、敬太郎の「変容」は、須永を相手にした時にだけ起こっているものではないだろうか。こうした点について考察していく上で、まずは敬太郎が人々の話を聴きたがる理由を明らかにする。さらには、敬太郎の「聴きたい」欲望に回収されない須永が現れることで、敬太郎に「変容」の契機が訪れること、加えて、「聴き手」敬太郎の「変容」の途上で敬太郎と須永の関係が問い直されていることを論じていきたい。

### 一 敬太郎の「孤独」

「風呂の後」の章において、敬太郎は「遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年」と紹介される。敬太郎の「浪漫」に

対する欲望は、蛸狩の話、護謨林栽培の話などに表れるわけだが、「彼の異常に対する嗜欲は中々是位の事で冷却しうには」ない。敬太郎の「浪漫」への憧れは「想像」で満足させられるようなものではないのである。「何処か尋常と変つた新しい調子を、彼の神経にはつと響かせ得るやうな事件に、一度位は出会つて然るべき筈だ」とあるように、敬太郎は「浪漫」を切望している。なぜ敬太郎は「浪漫」を求めるのだろうか。この問いについて考察する上で、敬太郎の置かれている状況を確認したい。敬太郎が現在送っている生活は次のように書かれている。

所が彼の生活は学校を出て以来たゞ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問する位のもので、其他に何といつて取り立てゝ云ふべき程の小説は一つもなかった。彼は毎日見る下宿の下女の顔に飽き果た。毎日食う下宿の菜にも飽き果た。(略)益眼前の平凡が自分の無能力と密接な関係でもあるかのやうに思はれて、ひどく盆鎗して仕舞つた。(「風呂の後」五)

敬太郎にとつて「毎日見る下宿の下女」と「毎日食う下宿の菜」は同列に、「飽き果た」ものと認識されている。敬太郎はすでにそれらを「飽き果」るほどに「知っているもの」と考えているのだ。さらには「紹介状を貰つて」訪問する「知らない人」は「訪問する位のもの」(傍点引用者)とあるように、「未知」のものとして恐怖や驚きをもたらす対象とは認識されていない。敬太郎にとつてそれらは、いずれ「知り得るもの」であり、「取り立てゝ云ふべき程」のものではないのだ。つまり敬太郎は、目の前の「世界」をすでに「知っているもの」といずれ「知り得るもの」に二分して認識しているのである。

エマニエル・レヴィナスは、すでに「知っているもの」といずれ「知り得るもの」といった形で二分される「世界」は、最終的に「既知」に集約されてしまうのであり、そこでは「世界」は「私の所有物」となつてしまふと説明した。<sup>〔7〕</sup>こうした「世界」認識においては、自身の思い通りに「所有」できないもの、言い換えれば「既知」に収斂されないものは想定されない。レヴィナスは「既知」に収斂し得ないものを「他者」と呼んだが、敬太郎の認識する「世界」

には、レヴィナスが言う「他者」がないのである。

あらゆるものを最終的に「既知」に集約してしまうことの問題点は、そうする主体が目の前「世界」における「出来事」の中に決して足を踏み入れることができないという点にある。合田正人は「出来事」とは、主体がその主人として引き受けることのできないものの謂である<sup>8)</sup>と説明したが、敬太郎は森本との会話でもわかるように「出来事」に足を踏み入れることは決してしないし、またできない。その理由は、足を踏み入れることで「出来事」に翻弄されてしまつては、その「出来事」を「既知」に集約することできないからであり、また敬太郎が「出来事」を「引き受ける」ことのできない「世界」の住人だからである。

しかし、「世界」におけるどんな「出来事」にも踏み込まずにいる主体は「世界」から隔絶されているような「孤独」感に襲われざるを得ない。レヴィナスの言葉で言えば、「(すべてが「既知」であるという意味で：引用者注)すべてが与えられているのだが、そのすべてがよそよそしい<sup>9)</sup>」「孤独」である。敬太郎は、自身が目の前の「世界」に対して感じている「よそよそしさ」を、次の「或宗教家の談話」に似

ていると考えている。

其宗教家は家庭にも社会にも何の不满もない身分なのに、自ら進んで坊主になつた人で、其当時の事情を述べる時に、何うしても不思議で堪らないから斯の道に入つて見たと云つた。此人は何んな朗らかに透き通る様な空の下に立つても、四方から閉ぢ込められてゐる様な氣がして苦しかつたのださうである。樹を見ても家を見ても往来を歩く人間を見ても鮮やかに見えながら、自分丈硝子張の箱の中に入れられて、外の物と直に續いていない心持が絶えずして、仕舞には窒息する程苦しくなつて来るんだといふ。(「停留所」十四)

「此宗教家の心に何処か似た点がある」と思う敬太郎は、「世界」から「隔絶」されている「孤独」の内にいる。敬太郎の抱く「孤独」は、彼の生きた時代状況に因るところもあるだろう。竹内洋は「敬太郎が卒業後に直面した就職難は(略)当時ありふれた現象だった」と、明治四十年代の学士就職難を指摘している<sup>10)</sup>。就職難という未来に対する

閉塞感は、敬太郎の感じる「孤独」と無関係とは言いい切れないだろう。しかし「田口の世話で、ある地位を得た」後もお、敬太郎が「浪漫」を求めていることから、時代状況が改善したところで、敬太郎の「孤独」が解消されるわけではないことがわかる。敬太郎が抱く「孤独」の原因は、「世界」を最終的に「既知」に集約しようとする、彼の「世界」認識のあり方に深く関係しているのである。

敬太郎は「世界」を「既知」に集約してしまうために「孤独」なのであり、それゆえに「既知」に集約されない「未知」の「浪漫」を求めずにはいられないのである。しかし、「わざと廻り路までして」共に風呂から帰ってまで、話をせがむ相手にもかかわらず、森本の提供する「浪漫」では敬太郎の「世界」は相対化されない。敬太郎は、森本の話をも「材料」「利益」と表現し、「既知」に集約するような聴き方しかできないのである。

彼（森本：引用者注）は又非常に豊富な材料の所有者であるといふ事を容易に証拠立てる。（風呂の後）三、傍点引用者）

此日も例によつて例の様な話が出るだらうといふ下心から、わざと廻り路迄して一所に風呂から帰つたのである。（略）（森本の経歴談は：引用者注）敬太郎に取つては、多大の興味があるのみではない、聞き様次第で随分利益も受けられた。（風呂の後）四、傍点引用者）

僕のやうな世間見ずは、御話を伺うたんびに利益を得ると思つて感謝してゐる（風呂の後）七、傍点引用者）

敬太郎は森本の話聴く際に、子どもを亡くし妻と別れたという、森本の過去に配慮する気は微塵もない。敬太郎はあくまでも自身に還元される「材料」「利益」として、森本の話聴くのだ。つまり、森本が提供する「浪漫」は、「既知」で充満した敬太郎の「世界」を相対化し、彼をそこから救い出してくれるものではないのである。この意味で敬太郎はレヴィナスの言う「他者」として森本を見出しではない。では、敬太郎は「既知」の充満する自身の「世界」をどのように相対化するのだろうか。

## 二 「未知」に留まる術

敬太郎は田口による探偵の依頼を「待ち設けた空想よりも猶浪漫的」だと感じ、探偵に赴く。この探偵行為において、田口が尾行を依頼した「彼が電車を降りてから二時間以内」に、敬太郎は探偵すべき男ではなく、停留所に立つて誰かを待っている女のことしか気にすることができない。「定刻の五時を過ぎた今」、「早く下宿へ帰つて正気の人間に為」つても構わないとき、敬太郎は次のように思う。

定刻の五時を過ぎた今だから、断念しても夫程の遺憾はないが、女の方は何んなつまらない結果に終らうとも、最う少し観察してゐたかつた。（「停留所」二十八）

なぜ敬太郎は目的の男自体を探すのではなく、「何んなつまらない結果に終らうとも」女を「観察していた」いのだろうか。その理由は二つ考えられる。一つは、見知らぬ女という「未知」をこれまで同様に「利益」として自身の「既知」に集約するためである。女の隠された部分ばかりに視

線を向ける記述からは、女の「未知」を「既知」にできない敬太郎の苛立ちが感じられる。

此女は処女だらうか細君だらうかといふ疑ひが起つた。（略）第一に何方の階級に属する人だらうといふ問題が、新たに彼を襲つて來た。（「停留所」二十九）

この他にも嫁いだ経験や年齢を想像しながら、敬太郎は女の「未知」を「既知」にしようとする。しかし結局、敬太郎は女の名前も、女が語る話の内容すら「既知」のものにできない。女は敬太郎にとって「未知」であり続けるわけだが、女に対する敬太郎の態度は尾行を続けるうちに變化する。敬太郎は二人の尾行が終わらうとするとき次のように思う。

実をいふと、彼は男よりも女の方に余計興味を持つてゐたのである。男と女が此所で分れるとすれば、無論男を捨てゝ女の先途丈を見届けたかつた。（「停留所」三十五）

このときの敬太郎にとって、女が「未知」であることは、苛立ちをもたらすものではない。敬太郎は女を、「既知」に集約させるのは別の仕方では認識しようとしているのである。これが先の問いに対する二つ目の答えとなるだろう。

「見張りの時間を延ばした（略）原因にも何にもならない見ず知らずの女」になぜ「余計興味を持」つか。その明確な理由を敬太郎自身は意識していないが、先述したように敬太郎が「既知」の充滿した「孤独」の中にあることを考えれば、敬太郎は「既知」の「孤独」から彼を救い出すものとしての「未知」に惹かれずにはいられない状態にあると言える。それゆえ、敬太郎は女を簡単には「既知」にせず、「未知」にしたままでその判断を保留しているのである。

「未知」の状態に留まる敬太郎のこうした態度は、男を追う彼の視線をも変化させる。当初「探偵して然るべき何物をも彼の人相の上に有つて居なかつた」と「既知」に集約されていたはずの男は、探偵行為の最後の場面で、敬太郎に「未知」のものと認識され直すのである。

此時不図、こんな窮屈な思ひをして、入らざる材料を集るよりも、いつそ露骨に此方から話し掛けて、当人の許諾を得た事実丈を田口に報告した方が、今更遅滞の様でも、まだ氣が利いてゐやしないかと考へて、自分で自分を彼に紹介する便法を工夫し始めた。（「停留所」三十六）

探偵行為の最後において、敬太郎は、停留所の男に関して得た情報は「入らざる材料」に過ぎなかつたと考え、男への認識を「未知」へ差し戻している。敬太郎のこうした「世界」認識の変化で注意すべきは、敬太郎が「未知」である状態にこらえる術を持ち得た一方で、彼が停留所の女と男に見出した「未知」からいつでも身を引けるよう準備をしているという点である。

自分が田口から依託されたのは女と関係のない黒い中折帽を被つた男の行動丈なので、彼は我慢して車台に飛び上がるのを差し控へた。（「停留所」三十五）

彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られてゐるのだから、もう是で偵察の

役目は済んだものとして、下宿へ帰つて寝ようかとも思つた。(「停留所」三十六)

自身の行動は田口からの「依託」「依頼」なのだと、敬太郎が度々思い起こすのは、「未知」の状態に留まることの不安定さに耐え難いからであり、そこからいつでも撤退できるよう準備しておくためである。敬太郎のこうした態度は、かつて森本を前に「何うでも構はない様な氣」をもつた態度とそれほど変わらない。敬太郎は、停留所の女と男の「未知」が「既知」に回収されないことに耐え難ければ、「何うでも構はない様な氣」を持つていつでも彼らの「未知」を放り出せるのだ。敬太郎にとっては彼らもまた森本同様に、敬太郎を「既知」の充滿した「孤独」の「世界」から救い出す「他者」にはならないのである。

「未知」であることの不安定さを耐え難く感じる敬太郎の様子は、探偵行為の後、松本に会いに行ったとき少し変化する。「薩張訳が分らなかつた」「不思議に感じた」「一種変つた人だ」「変に特別な男らし」いなど、はじめに敬太郎は簡単な言葉で松本を意味づけ「所有」しようとする。だ

がどうにも「既知」にできない松本を前に、敬太郎は「松本の何者なるかを斯ういふ風に考えつゝ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物ぢやあるまいかと疑り始め」る。

ここでの敬太郎は「未知」の状態に留まることで、あらゆるものを「既知」にしようとする自身の「世界」認識のあり方を相対化し始めている。敬太郎は、「漠然たる松本」という「未知」に留まることによって、言い換えれば「其人の本体を髣髴するに苦しむ」ことによって、敬太郎は目の前の人物の「本体」などそう易々とはわからないこと、つまりそう簡単には「既知」にできないことを知るのである。

しかし「未知」に留まることで、彼が「既知」の充滿する「世界」の「孤独」から救い出されるわけではない。「未知」とはいつか「既知」に収斂されることを前提として名付けられているに過ぎないものだからだ。敬太郎が「硝子張の箱」の外に出るためには「既知」とも「未知」とも名付けられない、レヴィナスの言う「他者」の出現が必要なのである。「他者」の出現によって、敬太郎は目の前の「出



来事」を傍観する立場から、巻き込まれる立場へ移行することが出来るからだ。では、敬太郎にとつての「他者」はどのようにして出現するのだろうか。

### 三 見出される「他者」

停留所の女と松本を早急に「既知」にせず、「未知」のまままでの判断を保留する術を得た敬太郎だが、彼が「未知」であることにともなう耐えなければならぬ相手は、須永市蔵である。次に引用するのは、敬太郎が「友達」の須永に尋ねたいことを尋ねられずに、「未知」のままにしまふ場面である。

是程氣に掛る女の事を、率直に切り出して聞けない筈はなかつたのだが（略）今しがた君の家へ這入つた女は全体何者だと無邪氣に尋ねる勇氣も出なかつた。（「停留所」三）

一度下座敷で若々しい女の笑い声が聞えた時などは、誰か御客が来てゐるやうだねと尋ねて見やうかしらんと

考へた位である。所が其考えてゐる時間が、既に自然を打ち壊す道具になつて、折角の間が間外れにならうとしたので、とう／＼口へ出さずに已めて仕舞つた。（「停留所」四）

なんとか話の流れに乗せて「序に君の分も聞こうじゃないか」と「後姿の女」について尋ねる敬太郎の質問は、「今日は咽喉が痛いから」と須永にかわされてしまふ。この直後、敬太郎が「どういう料簡か」「煙草屋へ飛込」み一本の葉巻を吸わないではいられないのは、須永を「既知」に回収できず、「未知」の状態を保留し続けなければならない不安定さゆえだろう。敬太郎は葉巻を吸い、歩きながら「猶須永の事を考え」るが、「その須永は決して何時もの様に単独には頭の中へは這入つて来な」と悶々とする。

ここで敬太郎は、須永の「未知」に困惑している。しかし、その困惑の仕方は、森本や停留所の女、松本に対するものとは違う。敬太郎は、彼らに見出した「未知」に留まることが耐え難ければ、いつでも彼らの「未知」から撤退し、あらゆるものが「既知」である馴染みの「世界」へ立

ち帰ることができた。しかし、須永に対してはそうではない。敬太郎は須永の「未知」を前に「猶須永の事を考へ」、須永が「頭の中へは這入つて来な」いことに苦しみ、さらには須永に「冷笑かされた」ような気さえしながらも、須永の「未知」から撤退しないのである。

なぜ敬太郎は須永の「未知」から撤退しようとはしないのだろうか。その理由は、かつて敬太郎の「既知」に回収されていたはずの須永が、突如、敬太郎の知らない「未知」の人物として見出されたからである。つまり須永は、あらゆるものを「既知」に収斂する敬太郎の世界観にかつては位置づけられていながら、そこから逸脱するものとなり、「既知」の充満した彼の世界観に揺さぶりをかけているのである。

さらに言えば、ここで敬太郎は「軍人の子でありながら軍人が大嫌いで、法律を修めながら役人にも会社員にもなる気のない、至って退嬰主義の男」だと既に知っていたはずの友達・須永を失っている。敬太郎が須永の言動に気を配るのは、かつてよく知っていたはずの友達・須永を探しているからである。それゆえに、敬太郎は須永の発する言

葉がたとえ 未知 であっても受け止めないわけにはいかないのだ。

彼（敬太郎：引用者注）は理屈が大嫌ひであつた。（略）従つて恐れる男とか恐れない女とかいふ辻占に似た文句を、黙つて聞いてゐる筈はなかつたのだが、（略）敬太郎も能く解らないながら素直に耳を傾むけなければ済まなかつたのである。（「須永の話」十三、傍点引用者）

須永の語る「男対女の問題」は敬太郎には「未知」である。しかし彼は「よく解らないながら素直に耳を傾むけなければ済まな」い。敬太郎のこの態度が須永だけに向けられた「特別」なものであることは、敬太郎の松本に対する態度と比べるとよくわかる。次に挙げるのは松本と初対面の時に、松本が語る話に対して敬太郎が持った感想である。

松本の云ふ事は（略）敬太郎の血の中まで這入り込んで来て、共に流れなければ已まない程の切実な勢ひを丸で持つてゐなかつた。其代り敬太郎の秩序立たない断片

的言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。（「報告」十二）

「松本の云う事」が敬太郎に響かないのと同様に、敬太郎の言葉も松本には届かない。敬太郎が興味を持つている「男対女の問題」についても、松本の言葉は、敬太郎の「血の中まで這入り込んで」来ないのだ。

内田樹は「他者」は「私の無能力を媒介して、はじめて顕在化する」と言ったが、敬太郎もまた須永の「未知」に対してはその「無能力」を顕わにしている。須永の話は「敬太郎の理解力を苦しめ」るのであり、また須永の「複雑な事情」を実際に須永の口から聴いてもうまく理解できない敬太郎にとって、「既知」であつたはずの須永は「未知」になる。敬太郎は、須永の何ものをも「既知」に回収できない自身の「無能力」を思い知らされるがゆえに、須永をレヴィナスの言う「他者」として見出すのである。須永が「他者」であるゆえに、敬太郎にとって須永は「特別」なのだ。

「他者」の出現は、敬太郎が主体的にコントロールできるものではない。家族構成も生い立ちも、その性格も、敬

太郎にとつては十分に「既知」であつたはずの須永が、突如として「未知」のものと見出されるとき、これまで築いてきた敬太郎の世界観は瓦解する。敬太郎の世界観を支えていた「既知」とはどういう状態のことなのか、もはや敬太郎にはわからない。だからこそ、須永は、「既知」とも「未知」とも判断がつかない人物、言い換えれば「他者」として現れるのである。「世界」把握の基軸を失つた敬太郎は須永に対して「受動」的になる他ない。つまり、敬太郎はここで、須永という人物を認識する上でイニシアチブを持ってない「受動」的な立場におかれるのだ。

内田樹は「他者」を前に自身が「受動」的にならざるを得ないゆえに、これまでの「私」からは想定されない「私の未来」が生まれることを指摘した。

おのれの起源がおのれのうちにはないことを受け容れること。（略）「自己同一者の未来とは異なる私の未来」がそこには望見されている。「私ではない私」の出現が確信されている。（略）（私の未来）は：引用者注）おのれの根源的な受動性、被造性の覚知に至つたときにはじめて

## 結実する<sup>一三</sup>

かつて「世界」を認識する際の拠り所としていた世界観の瓦解は、「私」の「世界」に対する解釈を留保させる。どのようにも意味づけることのできない「他者」の前で「私」は「受動性」を持たざるを得ない。しかしその「受動性」によつてこそ、「私の未来」にはこれまでの世界観からは生まれ得なかった「未来」が生まれるのである。つまり、須永が「他者」として現れることで、敬太郎は、かつて「或宗教家」がその「孤独」を喻えた「硝子張の箱」の外へ出て、須永の「事情」、つまりそれまでの敬太郎であれば引き受けることのできなかった「出来事」に巻き込まれる「未来」の可能性を手にし得るのである。

「須永の話」が始まる時、敬太郎は「須永に対してなら（略）此物数寄を満足させる権利があると迄」考えていた。しかし、敬太郎の言う「権利」は、須永の話が進むにつれてだんだんと影を潜めていく。須永の話が始まるや否や、敬太郎は「権利」を主張することはもちろん、口を挟むことさえしない。「よく解らない」須永の話に「素直に耳を傾

むけなければ済まな」い気がしているだけである。

敬太郎のこうした様子から浮かび上がるのは、彼の須永に対する気遣いである。敬太郎は須永に対してだけは、かつて眠っている森本を揺り動かして話をさせたような暴力的なこと、また初対面の松本に家族構成を尋ねたようなぶしつけなこともしないのだ。なぜ敬太郎は須永を気遣うのか。その理由は、敬太郎にとつて須永が「他者」であるからだろう。つまり、須永が「既知」に収斂できない「他者」であるがゆえに、敬太郎はある種の怖れをもつて須永に対峙しなくてはならないのである。

「須永の話」を聴き終えて、敬太郎は松本の元を訪れる。そこで敬太郎が松本に尋ねるのは、須永と千代子の関係である。こうした敬太郎の態度は松本に「君だの僕だのが何の蚊のとやらぬ世話を焼くのは却て当人達のために好くあるまい」といなされるのだが、しかし一方で、敬太郎は松本に「君が市蔵のために折角心配して呉れた親切に対する前からの行掛さえなければ、打ち明けない筈」の話を打ち明けさせるのである。「僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有たない話」を松本に打ち明けさせてしまうのは、

敬太郎の態度に切迫したものがあつたからだとは考えられないだろうか。

岡真理は、「(なぜだか明確な理由はわからないが；引用者注)

自分にとり憑いて自分を放さない」ような言葉や「記憶のなかに落ち着く先を持たない(出来事)」が、それが「未知」であることによつて、自分を捉えて離さない状態を「領有」と言つたが、須永はまさに彼を取り巻く「事情」という出来事に「領有」されている状態にある。須永の「事情」に「要らぬ世話を焼」かないではいられない敬太郎は、須永の「事情」に「領有」されつつあり、切迫した状態で松本に会いに行つていふと考えられるだろう。須永の話は「敬太郎の血の中まで這入り込んで来て、共に流れなければいまない程の切実な勢を」持ったのだ。

敬太郎は、須永の「事情」を前にイニシアチブをとれない経験をする。それにより「硝子張の箱」の外へ出て、その内では想定され得なかつた「未来」の可能性を手にする。しかし、敬太郎はまだ須永の「事情」に巻き込まれてはいない。では、「事情」を前にして判断を保留する敬太郎が持つ「未来」の可能性とはどのようなものなのだろうか。

## おわりに 「硝子張の箱」の外へ

本論考では、「既知」を充満させる敬太郎の「世界」認識が、彼に「孤独」感をもたらしていたこと、それゆえに「未知」をもたらず「浪漫」を切望しないわけにはいかなかったことを確認した。さらに、「未知」に留まることに耐えること、加えて「他者」を見出すことにより、彼の「世界」認識が変化したことを論じた。「既知」の充満した「世界」に窒息しつつあつた敬太郎は、須永という「他者」を見出すことによつて、「硝子張の箱」の外へ踏み出したのである。

「結末」の章において、敬太郎は「硝子張の箱」の外からもう一度、これまで彼に話を語ってくれた語り手たちを捉え直す。「硝子張の箱」の外へ出た敬太郎は、森本をもはや「材料」や「利益」として扱うことはない。

彼(敬太郎：引用者注)は人間としての森本の面影を、夢現の如く見る事を得た。さうして同じく人間としての

彼に、知識以外の同情と反感を与へた。(結末)

「人間としての森本」に注目できる今の敬太郎なら、森本の「現在」の進退を「何うでも構はない様な気が」することなどないだろう。敬太郎は、他に田口と松本によって「幾分か己の世間的経験が広くなつた様な心持がした」ものの「深さは左程増したとも」言えないとしている。また宵子の死を語る千代子には「悲哀を出来る丈長く抱いてゐたい意味から出る涙」といったある種の技巧を感じ取る。敬太郎は須永以外の語り手たちをこのように捉え直す。しかし須永に対する態度は彼らに対するものとはまったく異なる。須永の話だけは、敬太郎にとって「須永の為に深く掘り下げられ」るものである。

彼は須永の口から一調子狂つた母子の関係を聞かされて驚いた。彼も国元に一人の母を有つ身であつた。けれども彼と彼の母との関係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果に纏綿されてゐなかつた。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑はなかつた。

つた。同時に親子の間は平凡なものと諦めてゐた。より込み入つた親子は、たとひ想像が出来るにしても、一向腹には応へなかつた。それが須永の為に深く掘り下げられた様な気がした。(結末、傍点引用者)

「より込み入つた」親子は「たとひ想像が出来るにしても、一向腹には応へないものであるのに、須永とその母という親子の話だと「深く掘り下げられた様な気が」するのは、敬太郎にとって須永はもはや簡単に「既知」に分類できるような相手ではないからだ。絶対的に「未知」であり続ける「他者」須永を、苛立ちを感じることなく受け入れる敬太郎には、かつて「未知」の不安定さに耐え切れず、そこからいつでも撤退し得る道を確保していた姿は見受けられない。

彼(敬太郎：引用者注)は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所である。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪い、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。さうして、大きな空を仰い

で、彼の前に突如として已んだ様に見える此劇が、是から先何う永久に流転して行くだらうかを考へた。(結末)

敬太郎は、須永の「事情」という「其中」に「遂に這入れなかった」(傍点引用者)と振り返る。彼が「遂に這入れなかった」と思う理由は、須永の話から須永を心配し、松本の元へ走った、という敬太郎の行動が須永へは何ら届いていないからである。つまり、敬太郎はまだ須永の「事情」に巻き込まれていないのである。それゆえ、敬太郎にとつてそれまでの過程に対する結論は「物足りない所」なのだ。

しかし、それは同時に「仕合せな所」とも記される。「仕合せな所」となる理由は、敬太郎が「既知」のものとして信じていた須永を沈黙という「受動性」をもつて受け止め得る人物だからであり、それゆえ「他者」として見出し、そのことによって自身の世界観を相対化し、「硝子張の箱」の外へ一步踏み出せたからである。この意味で、「聴き手」敬太郎の「変容」は、須永を契機としているのである。

敬太郎は「物足らなさ」ゆえに「何の蚊のと要らぬ世話を焼くのは却て当人達の為に好くあるまい」と理由をつけ

ながら、「事情」の中に首を突っ込まない松本とは決定的に異なる人物である。「這入れない」ことに「物足らなさ」を感じ、「突如として已んだ様に見える此劇」を「これから先どう永久に流転していくだらうか」と須永の「事情」の未来を気に留める敬太郎だけが、須永を「事情」の中から引つ張り上げる可能性を持ち得るのだ。須永が自身の立ちに始まる長い話を敬太郎に語る理由は、ここにある。つまり、既に松本に相談して解決を見なかった問題を、須永が「敬太郎の予期したよりも遥かに長い」話にして敬太郎に語る理由は、敬太郎だけが須永を「事情」の中から引つ張り上げる可能性を持ち得る人物だからなのだ。

工藤京子は、須永の話が、「千代子の話を共に聴いた敬太郎を前に「不人情」という枠組みを解体することから始めなければならぬ」<sup>11</sup> かつたことを指摘しているが、須永は千代子による「不人情」という批評がたとえ敬太郎に聞かれても、わざわざ弁明する必要などなかったはずである。しかし、長い話を語り、弁明し、さらには自身を「領有」し続けてきた「出来事」を共に俯瞰する相手として敬太郎を選ぶ須永の様子からは、敬太郎にとつて須永が「特別」

であり「他者」であると同様に、須永にとつても敬太郎が「硝子張の箱」の外へ抜け出る道を示す「未来」をもたらす「他者」となることを予感させるのである。

〔注〕

- 1 山田有策「彼岸過迄」敬太郎をめぐる（竹盛天雄編『別冊国文学』No.14夏目漱石必携Ⅱ—一九八二・五、学灯社）。
- 2 前出「彼岸過迄」敬太郎をめぐる。
- 3 工藤京子「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」『日本近代文学』第四六集、一九九二・五。
- 4 石原千秋「語ることの物語」『反転する漱石』一九九七・一一、青土社。
- 5 工藤は、「聴き手」敬太郎の「変容」する過程を次のように説明している。「敬太郎は森本から、ただ娯楽のために話を聴くことから始めたがそれは敬太郎に何ら変化を与えなかった。だが須永の母の話を聴くことで彼は迷いを覚えた。中空の探偵行為を経て、彼は相手を知るためには、まず自分が「聞きたい事」という主体を持たねばならないこと、さらには相手には「本体」が、しかもそれは「聞きたい事」の向こう側にこそあるのだということを知った。須永の話を聴くに至って、彼は話の（核）

そのものを見抜く眼を持った。そして今（略）松本の「本体」を「発見」することになるのである。」（前出「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」）。

- 6 前出「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」。
  - 7 エマニエル・レヴィナス、西谷修訳『実存から実存者へ』二〇〇五・一二、ちくま学芸文庫。
  - 8 合田正人『レヴィナスを読む（異常な日常）の思想』一九九八・八、NHKブックス。
  - 9 前出『実存から実存者へ』。
  - 10 竹内洋『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』二〇〇五・三、世界思想社。
  - 11 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』二〇〇一・一二、せりか書房。
  - 12 前出『レヴィナスと愛の現象学』。
  - 13 前出『レヴィナスを読む（異常な日常）の思想』。
  - 14 岡真理『記憶／物語』二〇〇〇・二、岩波書店。
  - 15 前出「変容する聴き手——『彼岸過迄』の敬太郎——」。
- ※付記：本文の引用は『漱石文学全集』第六卷（集英社、一九八三・一）により、適宜旧字を新字に改めルビを省略した。